

アメリカにおけるスクールカウンセラーの現状と課題

著者	山谷 敬三郎
雑誌名	北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	2
ページ	31-47
発行年	2002
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000652/

アメリカにおけるスクールカウンセラーの現状と課題

Present Conditions and Problems of School counselors in the USA

山 谷 敬 三 郎

Keizaburo YAMAYA

Abstract

I have been engaged as a public school counselor for the trust research division of the Ministry of Education since 1997. I have been conducting research concerning methods for child students backup service based on this experience. We / Japanese teachers and parents / encounte many dificult problems in instructing our pupils. Fortunately, I was able to participate in the school counselor training program conducted in the USA by the Japanese Association of Educational Psychology in the years 2000 and 2001 . I also had the opportunity to participate in the research conference of Multi-Disciplinary Scienctific Research Conference sponsered by the Japan and USA Academic Exchange Society at U.C.L.A. in 2001.

In this paper, I offer proposals about systems for student support and manuals for ADHD students.

This reseach was assisted as a special project (overseas research)by Hokkaido Asaigakuen University .

I は じ め に

平成10年度より、文部省の委託研究事業である公立学校スクールカウンセラーの業務に従事している。この経験から学校における児童生徒支援サービス体制について研究と実践を継続している。幸い、平成11年度、平成12年度に実施された日本教育心理学会が主催するスクールサイコロジスト米国研修に参加する機会を得た。平成11年度は、テネシー州の州都である Nashville 市にある Vanderbilt University の Peabody College とその地域にある小・中・高等学校を訪問し、主に School Psycologisit の実態について調査研究を行った。平成12年度は、テキサス州 San-Antonio 市にある Trinity University を中心に School Counselor (Guidanse Counselor) の職務、役割等について調査研究を行った。なお、平成12年度には、本大学の特別研究（海外研究）の補助を受けることができた。さらに、本年度は、カルフォルニア大学ロサンゼルス校、サンフランシスコ州立大学、ノートルダム大学等で心理学、カウンセリング研究者との研究協議にも参加する機会を得た。

本稿では、アメリカにおける児童生徒に対する支援サービス職員のうち、スクールサイコロジストとスクールカウンセラー（ガイダンスカウンセラーともいう）を中心にその職務・役割をまとめると共に、その職務の具体例として、日本においても最近その指導の在り方が問われている ADHD についての資料を紹介することを目的とする。

II スクールサイコロジストを含む対児童生徒支援サービス体制

アメリカのスクールサイコロジストは、特別教育と密接な関連をもって発達してきた。アメリカの学校を訪問し、説明の中でよく聞く言葉に、「どの子どもにもその子に応じた教育をしなければならない。そして、どの子どもも、その子の能力に応じて生産的な市民になるよう教育されなければならない」という言葉がある。この言葉の精神に基づいて行われるアメリカの学校教育には、2種類の特別教育がある。1つは特別な才能があると認められた子ども達への教育で、もう1つは通常のクラスの授業についていけない子ども達のための教育である。

前者は、ある特定の教科のクラスが週1回の割り合いで設定されていたり、さらに、優秀な子どもは、地区以外の学校の様々な英才児教育プログラムに参加することもできるようになっている (Magnet School とか, Attach School と呼ばれている)。そうした特別な才能がある子どもの評価と選別は、Student Support Team が行う。それは、スクールサイコロジスト、校長、保護者、ガイダンス・ティーチャー、特別教育の教師で構成されたチームである。20年から30年前は、「飛び級の制度」があり、学年を飛び越して進級させていたが、精神発達と知的発達のアンバランスが子どもの健全な発達に悪影響を及ぼすことが分かり、今日では科目毎に特別教育のサービスを行うようになっている。“Never settle for less than your best!”

(ベストでないのに落ち着くな) という考えである。才能のある子どもの特別教育クラスには、才能のある子どもだけの「挑戦クラス」や総合学力テスト (TCAP) で極めて高い得点を取った子どもがクラス担任の推薦で入る、いわゆる「統合クラス」が教科毎にある。それを Enrichment と呼ばれる専門教師が担当し、教えている。

後者は、通常のクラスの授業についていけない子ども達、つまりハンディを背負った子ども達のための特別教育で、日本では養護学校や特殊学級レベルの教育に相当する。例えば、Grassland Middle School (テネシー州) では、3つのレベルに分かれて特別教育が行われていた。つまり、1つは、重度の障害 (脳性麻痺) を持った子どものクラス、2つは、ダウン症や精神遅滞など中度の障害をもった子どものクラス、そして、3つは、LD (学習障害) のクラスである。これらの特別教育の対象となる子ども達は、精神遅滞、発音障害、聴覚障害、言語障害、視覚障害、情緒障害、身体障害、虚弱児、学習障害、脳障害、自閉症などで、アメリカの子どもの人口の約14%に当たり、Nashville 市では1,700名の子どもが該当している。年齢的には、下は3歳から、上は22歳まで延長されており、障害のある子どもも教育される権利があることが保障されている。そして、これらの子どもは、リソース・ティーチャーが作成する個別教育計画 (IEP, 成人の障害児用として IEP-A) に則り、指導の充実が図られている。IEP がうまく

効果を奉しているかは、原則的には1年毎に見直しされるが、普段はスクールサイコロジストがリソースティーチャーと連携して一緒に個別教育計画の効果を点検している。

スクールサイコロジストは、こうした特別教育を受ける適格性の判定と親への告知、精神的ケア、個別教育計画の作成とその評価などに関与している。アメリカの学校教育は、個々の生徒が自分達の能力に応じて、才能に恵まれた生徒も学習に困難を感じる生徒も、ともに生産的な市民になる援助を受けることができるように改善されてきている。しかも、最近では以前には家に閉じこもっていたような重症の障害のある子どもも学校に通い、普通の子どもと一緒に教育の場で教育されることで、思いやりや市民的社会性を発達させ、トータル的で全人格的な発達を促進する環境を学校が提供するようになってきている。

こうした教育の一つとして、話し言葉に問題を抱えた子ども達の「ことばの教室」も整備されている。視察した教室に通う子ども達は、14人種と16カ国の言語を話す生徒が通ってきている。そこで、通常のクラスで話し言葉で不都合が生じなくなるまでの間「ことばの教室」に通うことになる。元々教育には理解のある家庭が多いとのことで、在籍期間は比較的短い。ことばの上達度は、それ以前の学校教育での学習の達成度と親のモチベーションによって決まるようで、この教室に来る前の学習成果が良ければ、早く言葉は獲得されるとのことである。

このようにアメリカの学校は、学習に困難を感じる子どものために、さまざまな援助プログラムが用意されている。そうした専門のカリキュラムの実施に対して、それぞれ専門の職員を配置している。日本と比べて学校に勤める教職員の多様さと人数の多さ、その連携が円滑に進んでいることが理解できる。カルフォルニア、テキサス、テネシー州の三州に共通する職種とその役割について概観する。

1 スクールサイコロジスト

スクールサイコロジスト（以下 SP と表記）は、普通学区で仕事をしており、通常1人が2ないし3校を受け持っている。SP が提供するサービスには次のようなものがある⁽¹⁾。①特殊な学習、情緒、行動の障害についての評定・診断・治療教育についての提言、または、適切な介入についての勧告、これらの生徒への個別教育計画についての立案と検討、②生徒の学習と適応の過程を理解し、彼らを援助するために親へのコンサルテーションをすること、③学習を促進し、学習障害や行動障害を克服するための教室での方法や手続きの開発と利用について教師にコンサルテーションを行うことなどである。その専門性のために必要とされる基準は次のとおりである。①個人の発達、②個人的人間評価、③個別的介入、④個別評価、⑤コンサルテーション、⑥集団評定、⑦プログラム評価、⑧法律的側面、⑨地域資源の活用、⑩研究法、⑪専門家の倫理、⑫スーパービジョン、⑬実習（学校で540時間）である。

2 スクールカウンセラー

ガイダンスティーチャー、ガイダンスカウンセラーともいう。中にはクライシスカウンセラーともいう仕事を行っているものもある。一般的に学校で仕事をしており、主要な関心は、生徒たちの正常な発達上のニーズや心配事である。スクールカウンセラー（以下 SC と表記）が提

供する一次的サービスには、①家庭から学校への移行を促進するための個別カウンセリング、②肯定的な態度や自己理解と自信を確立するための個別カウンセリング、③信頼と相互関係、問題解決を促進し、意思決定を援助するためのグループカウンセリング、④オリエンテーション、キャリアガイダンス、自分の方向付けを促進する集団活動などを担当する。その養成のカリキュラムには次のような内容がある。①教育的評価、②個人的、社会的カウンセリング、③学業・職業的カウンセリング、④プログラムの開発、⑤プログラム調整とスーパービジョン、⑥学校に対してのコンサルテーションサービス、⑦法律的側面、⑧専門家の倫理、⑨実習（学校で450時間）である。

3 スクールソーシャルワーカー

スクールソーシャルワーカーは、普通は学区のレベルで学校のために仕事をしている。通常スクールソーシャルワーカーが提供するサービスには次のようなものが含まれる。①社会的または適応の問題に関連する親や生徒へのケースワークをグループまたは個別に行う、②生徒とその家族にサービスを提供している地域資源とのリエゾン（連携）、③薬物濫用、自殺の恐れ、暴行、児童虐待などの危機状況で親その他へのコンサルテーションを行うことなどである。その専門教育の基準は、以下の内容である。①生徒への直接サービスとしての人間評価、②社会的介入、③コンサルテーション、④コーディネーション、⑤紹介、⑥サービスの開発、⑦調査、⑧専門家の倫理、⑨実習（学校で450時間）である。

4 児童・福祉・登校監督官

児童・福祉・登校監督官は、一般に学区レベルで活動しており、個々の学校のためにサービスを提供している。その内容は次のようなものがあげられる。①少年審判所や司法機関との接触を継続する、②教育法の条文とその他の児童福祉や登校に関する法律をわかりやすく説明すること、③義務教育に関する法律施行を徹底させること、などである。その養成基準は、出席に関する法律と少数民族の権利についての知識、出席に関する法を施行する技術、評定、実習とスーパービジョン（学校で90時間）である。

5 スクールナース

日本の養護教諭に該当する。各学校に配置されているが、特別教育に関する I E P 立案のメンバーともなる。

6 スクールポリス

訪問した学校には校門の前にパトカーが停まっていたのが目に付いた。校内には銃を携帯した警察官が巡回している。校長とトランシーバーで連絡を取り合いながら校舎内を見回っている姿が印象的であった。

III スクールサイキロジストとスクールカウンセラーの役割

SP は、子ども達が安全かつ健全な援助的環境の中で学習することを保障するために、様々なサービスを提供している。それらの中心となるサービスは、コンサルテーション、介入、アセ

スメント、教育プログラムの開発、研究とプロジェクト開発、健康管理教育などである。週45時間勤務として、平均して最も多く費やす仕事が予防とコンサルテーション関する活動で16.2時間、次が介入で13.5時間、3番目がアセスメントで9時間、そして、最後が書類書きや組織作りに6.3時間費やしているとのことである。SPは、通常2ないし3校に一名配置されている⁽¹⁾。

一方、SCは、中学校、高等学校には常時配置されている。Eakin Elementary Schoolには、児童数が多いということからSC(教頭の説明ではガイダンスティーチャーともいう)が配置されており、専用の教室を見学した。SCは、子ども達的意思決定や選択を行うのを援助したり、個別カウンセリングを行ったり、テーマを決めてそれについてクラスで話し合いをすることなどを支援している。生き方教育担当者とも考えられる。話し合いのテーマには、病気、離婚、家族の複雑な問題など、子どもが抱えている日常の問題を選んで指導している。SCは、子ども達にクラス単位で関わったり、個別の関わりを持ったりしている。また、教育の適格性を判断するための標準化したテストのコーディネーターの役割も果たしている。

1 スクールサイコロジストの職務

米国におけるSPの職務についての資料「スクールサイコロジストとは何か」からその役割、その職務内容について整理してみる⁽²⁾。

「スクールサイコロジストとはどんな人か：スクールサイコロジストは心理学と教育学について専門的な訓練を受けている。彼らは、自己の資質・能力と技術を、全ての子ども達が安全かつ健康で、しかも養育的な環境のもとで学習できるように支援するために、教師や保護者、そして精神的健康を支援する他の専門家とともに協力して仕事に当たる。スクールサイコロジストは、学校のシステム、効果的な教授法と実りある学習についてよく理解している。現在の子ども達は以前の子供達よりもより多くの困難な問題に直面している。スクールサイコロジストは、今日のような問題に対して思慮深く、かつ可能性のある活動を通して今後直面する様々な問題を解決するために貢献する。」

SPは、一人一人の子ども達の特殊なニーズやそれぞれの子ども達の状況に応じて援助する。SPは、効果的で多様な方法を用いて援助するが、概ね次のような役割を中心に行う。

(1) コンサルテーション

- ・学習や行動面に関する問題について教師や保護者、行政担当者と話し合い、健全なしかも効果的な手だてを講じる
- ・教師や保護者に子ども達の健全な成長と学習・行動面の効果的な発達に関する手だてについて理解を促すこと
- ・教師と保護者または、地域の教育関係機関との連携・協力に関すること

(2) アセスメント(個人、グループそして、組織について幅広い多様な方法を用いて評価すること)

- ・学習技術
- ・学習態度
- ・性格、情緒的な発達
- ・社会的スキル
- ・学習環境または学校の雰囲気
- ・特別な教育に関する対応について

(3) インターベンション(介入)

- ・子ども達やその家族と面談すること

- ・学習や適応についての葛藤や問題についての解決を支援すること
- ・子ども達やその家族に心理学的なカウンセリングを提供すること
- ・社会的なスキルや行動調整（規制）、その他の方法について訓練を提供すること
- ・家族や学校が巻き込まれる危機（たとえば離別や死別）について支援すること
- (4) プリベンション（予防）
 - ・潜在的な学習に関する困難性について明確にすること
 - ・子ども達の失敗の危険について予知すること
 - ・両親や教師に分裂的な行動に対処するための技術を提供すること
 - ・学校生活、人間関係における多様さの理解や評価、さらに耐性を養うこと
 - ・学校生活がより安全で、より充実したものになるように、学校全体の創意を幅広く発揮させること
- (5) 教育（次のような内容のプログラムを整備すること）
 - ・教授・学習の方略について
 - ・学級経営の方法・技術について
 - ・学習障害や性格異常の子ども達の活動について
 - ・児童虐待の実態について
 - ・危機管理について
- (6) 調査と計画立案について
 - ・効果的な学習プログラム、行動の危機管理システムや他のサービスについての評価について
 - ・学習や行動についての新しい考えや情報について一般化すること
 - ・学校の改善や再構成に関する計画や評価に関して貢献すること
- (7) 健康教育・予防について
 - ・学校と関連した健康援助サービスの包括的なモデルを提供するために、学校と地域に対して協力すること
 - ・子ども達と保護者に心理的健康と身体的健康に焦点を当てた地域の援助サービスを紹介すること
 - ・健康的な学校環境の創造のために保護者と教師の協力関係を醸成すること

上記のような概括的な役割を担っている SP との直接話し合いの機会を持つことができた。ウイルソン教育事務所（テネシー州南部）を訪問し、地方教育行政と心理教育的援助サービスとの関連についての説明を受けた。SP 資格取得のための実習生もあり、学校以外での実習期間が90日間必要であるとのことである。また、SP は修士課程修了が最低条件であるとのことであった。以下はその話し合いの中で得たスクールサイコロジストの援助サービスの内容で上記の1), 2), 3), 4)の具体的内容である。

(1) コンサルテーション・プリベンション（相談・予防）

- ・子どもに対しての危機に対処するプログラムを策定すること
- ・分裂症的な行動を伴う子ども達に対処するための技術を教職員に提供すること
- ・危機介入に関する学校の計画を明確にすること
- ・行動調整や指導方略について教職員へ情報提供すること
- ・地域における専門家（医師、精神科医、医療機関）との協力
- ・教育上または行動上の問題の解決のための効果的な予防対策
- ・児童生徒の支援チームへの参加
- ・行政官との相談
- ・教育委員会のプロジェクトチームや担当者会議への参加

(2) インターベンション（介入）

- ・特殊教育の必要な児童生徒や学校不適応児童生徒の行動調整の指導計画の立案
- ・個人またはグループカウンセリングの実施
- ・発達問題に関する教育プログラム開発のために教師やカウンセラーと協力すること

- ・児童生徒の心の問題や適応問題に関する解決を援助すること
- ・特殊教育に関する指導計画を開発すること
- (3) テスティング・アセスメント
 - ・身体的発達に関するアセスメント
 - ・能力的に優れた子ども達のアセスメント
 - ・特殊教育や適応問題に関する心理教育的アセスメント
 - ・カウンセラー、教師、保護者に関する面接調査
 - ・ADHD のスクリーニング
 - ・学校の学習環境や雰囲気に関するアセスメントの提供

2 スクールカウンセラーの職務

SC の職務は、その専門教育と深い関わりがある。それは、州や国のレベルでの認定の基準によって影響されている。州のスクールカウンセラーの専門教育プログラムの認定は州独自の基準があり、認定のための評価プロセスをもっている。カウンセリング及び関連教育プログラム認定委員会 (CACREP: the Council for Accreditation of Counseling and Related Educational Programs) は、国内最大のカウンセリングの協会であるアメリカカウンセリング協会 (ACA) の認定機関である。多くの州のカウンセラー専門教育プログラムは、CACREP の基準に準拠している。この基準には、8つの中核となる領域がある。スクールカウンセラーの知識とスキルはこの8つの領域の内容に合わせながら、カウンセラー教育プログラムの中で獲得される。また、スクールカウンセラーの役割は、国としての教育目標と関わりのあるプログラムとして提示されている。ここでは、こうしたスクールカウンセラー養成プログラムと教育目標との関わりから役割と職務についてまとめてみる。

1) 専門教育プログラム

ここでは紙数の関係から項目のみをあげることとする。①人間の成長と発達、②援助関係(援助過程の原理についての一般的理解のための学習を含む。) ③職業発達、④個人の評価、⑤集団、グループプロセス、グループカウンセリング、⑥社会的、文化的基盤、⑦研究と評価、⑧専門家としてのオリエンテーション(専門家の組織と協会、歴史と動向、倫理及び法的基準等)の8項目(領域)である。

2) アメリカ教育目標との関わり

2000年アメリカスクールカウンセリング協会 (ASCA) が発表した「子どもは私たちの未来である」の中でアメリカの教育目標との関連でスクールカウンセラーが果たす役割について述べている内容を次に紹介する⁽³⁾。

○目標 I 「アメリカの全ての子どもは、学ぶための準備をして学校をはじめる。」

- ・カウンセラーは直接、親と教師と共に取り組み、
 - ①子ども達が学べるよう肯定的な学校環境をつくりだすよう支援する。
 - ②全ての児童生徒のニーズに目を向けたチームワークによる努力結集を保障する。

- ③児童生徒の学習意欲を育成するのに必要な肯定的な自己評価と動機付けを開発するよう援助する。
 - ④児童生徒に学校という環境に備えさせるため、オープンな交流の場を増す。
 - ⑤将来の教育的発達に関連した情報と援助を提供する。
 - ⑥知的障害があるため、プレスクールのプログラムが必要な児童生徒を確認する。
 - ⑦ハンディをもちヘッドスタートを要する子どもを助け学校へ移行できるよう援助する。
- 目標Ⅱ「高校卒業が少なくとも90%に増加するようにする」
- ・カウンセラーは直接、全ての生徒、親、教師、地域の人々、雇用者と取り組み、
 - ①生活技能訓練を通して包括的・発達のスクールカウンセリングプログラムを持続的に受けられるようにする。
 - ②スクールソーシャルワーカー、スクールサイコロジストやスクールナースを含む他の専門家のサービスへのアクセスを保障する。
 - ③高校修了と卒業後の進路の探査を目標とする生徒各人のための総合的教育／職業プランを開発する。
 - ④学校から職業への移行プログラムを確立する。
- 目標Ⅲ「アメリカの生徒たちは、英語、数学、科学、歴史、地理を含む必須教科で能力を示して、4年生、8年生、12年生を終了する。そして、どのアメリカの学校も、すべての児童生徒に責任ある市民になり、その後我々の現在の経済社会における生産的な雇用に備えることができるよう自分の知力を十分使って学ぶことを保障する。」
- ・カウンセラーは新しい基礎技術を習得するため、発達のカウンセリングカリキュラムを通して直接児童生徒と取り組む。
 - ①いかにして情報を管理、組織化するか、いかにして意思決定をするか、いかにして変化に対処するかを学ぶ。
 - ②, ③, ④, ⑤省略
- 目標Ⅳ「アメリカの児童生徒は世界で一番の科学と数学の学力をもつようにする」
- ・カウンセラーは以下のことのために、児童生徒と直接取り組む。
 - ①職業の場で数学と科学が重要であることをどの生徒にも強調する。
 - ②中等教育終了後の教育を続けるのに備えて数学と科学のレベルを高めることを奨励する。
 - ③, ④省略。
- 目標Ⅴ「アメリカの全ての成人は読み書きができ、地球規模の経済競争に必要な知識と技術を持ち、市民としての権利を行使し、責任を果たす。」
- ・カウンセラーは以下のことのために直接児童生徒と取り組む。
 - ①個人の成長と発達を援助する。
 - ②身体的、精神的、情緒的な健康の大切さを理解する。
 - ③優れたコミュニケーションの技術と協力して働く技術を開発する。

④他の人とうまく関わっていくための対人関係の技術を学ぶ。

⑤多様な文化を背景にもつ生徒に最大限の発達を促進する適正なサービスを利用し、チャンスを生かすことを保障する。

⑥生涯学習を奨励する

○目標VI「アメリカの全ての学校に薬物濫用と暴力がなく、学習に導くことができる統制のとれた環境を提供する。」

・カウンセラーは以下のために児童生徒に直接関わる。

①個人の安全と虐待防止の関係機関とともに教育を行い情報を提供する。

②薬物濫用や暴力に関わるのを拒否するのに必要な効果的対処技法を開発する。

③自己主張や対立解決に焦点を合わせて問題解決と意思決定の技能を開発する。

3) スクールカウンセラーの役割

訪問した小学校では、ガイダンスティチャーの教室を訪問することができた。そして、「エイケン小学校におけるカウンセラーの役割の概要」というパンフレットを入手することができた。以下はその内容である⁽⁴⁾。

- ①：エイケン小学校で、私たちは、子ども達の知的学習能力だけでなく、より発達に関わる基本的な能力を支援することが大切であることを重視している。また、子ども達一人一人が知的能力を発達させるとともに、自己そして、他者を認め、さらに、彼らの持っている潜在的な可能性を開花させることを支援することが我々の課題であるとも考えている。
- ②：すべての子ども達は、自分のクラスの友達と一緒にガイダンス・クラスに参加する。それは、例えば、12日間に一回の割合で行うというようなローテーションで行う。ガイダンス・クラスでは主に、問題解決や判断の方法、対人交渉能力や協力関係の方法、自己理解や他者理解の技術について話し合いをしたり、説明をする。
- ③：カウンセラーのもう一つの重要な役割は、私たちの学校の子どもの達が抱える問題を解決するために、両親や教師と相談することである。私たちは、時には個々の子どもたちの知的あるいは行動・性格面の問題解決を援助するための直接的な介入の計画を立てたり、実際にその計画を実行する。
- ④：カウンセラーは、性格上の問題、学業の問題、又は病気や死の問題、友人の問題、転校の問題、身体的な問題家族の崩壊や離婚の問題などについて個々の子ども達との面接も行うし、小グループでの面接も実施する。
- ⑤：カウンセラーは、子ども達の学習・学業に参加するための能力を確かめるためのアチーブメントテストを実施する。
- ⑥：カウンセラーは、子ども達がどのクラスに在籍するのが適当なのかを決定するプロセスや手だてについての調整を行う。その際、子ども達の知的・学習能力のバランス、性、人種、民俗を両親や教師からの情報と共に考慮する。
- ⑦：カウンセラーのもう一つの重要な役割と責任は、S - t e a mの開催とその議長としての役割である。教師と行政官からなる会議で、現在教室に登校できていない子どもたちの状況に応じて、必要とされる対策を講じるためにクラスルーム担任と両親も含めて話し合う会議の開催とその決定に関わる責任である。
- ⑧：エイケン小学校におけるガイダンス指導の目的は、子ども達一人一人の個人的、社会的そして知的側面の可能性を成長・発達させるための支援を行うことである。私たちはそのために、安全と教育的な環境整備と構成に全力を尽くす。
- ⑨：カウンセラーの役割、その重要性は、常に変化するものであるとともに、子ども達への援助の方法も刻一刻と変わらざるを得ない。上に述べてきたこともカウンセラーの役割の全体を捉えているとは言い難い。私たちの仕事はまさに多種多様な多くの挑戦なのである。

IV 児童生徒支援サービスの具体例

ファミリースクールという日本ではなじみのない教育機関を訪問し、その目的や役割についてフラー博士から説明を受けた。日本では教護施設のようなものとも考えられる。矯正教育を行う施設とも考えられるが地域との連携の中で運営されている。そこでは、非行問題を起こし

た子ども達や自閉症の子ども達を対象に読書療法に用いるテキストや自己主張の段階的指導のプログラムなど実際の指導のプロセスについての資料を入手することができた。また、テキサス州の教育事務所発行の教師の手引書も数多く入手することができた。SPの専門性を理解する上でそれらの中から一部を紹介する。

1 FAST Track Project の概要と目的

FAST Track Project とは (Families and School Together) の略である。小学校低学年から中学生までの社会的適応及び学業を援助するために企画されたプログラムの1つである。このプログラムの参加者は、小学校1年生から15歳までの公立学校に通う児童・生徒と家族である。このプログラムの第一の資金援助者は National Institute of Mental Health であり、その他、National Institute on Drug Abuse, V. S. Department of Education, Center for Substance Abuse Prevention からの支援も得ている。

米国では犯罪、虐待、学校嫌い、退学が増加してきている。FAST Track Project は、若い人達が健康的に育つことを援助する目的で実施されている。FAST Track は多くの革新的なカリキュラムの総合であり、普通の子どもと at-risk な子ども（以下対象児）の双方に対して、犯罪、落第、ドロップアウトなどを防ぐことを目的としているものである。

1) FAST Track の基本的な内容

FAST Track には、次に挙げる基本的な三段階の活動 (A basic prevention curriculum) が含まれている。最終的には、多くの子どもが援助的なプログラムの役割を担ってくれることを目指している。

- 第一段階：・自己統制を高める
・コミュニケーション能力を高める
・仲間とよい関係をつくる
・責任ある行動をとる
・規則正しい生活習慣を身につける
・効果的な問題解決能力を身につける
- 第二段階：学校で実施される指導以外に、付加的な支援を目指した課外的なカリキュラムの実施をする。親の子育てに関する情報の提供や親同士討論するような機会を提供する。
- 第三段階：個別的な支援サービスであり、家庭教師、助言者をつけるなどの支援サービスの実施をする。

2) FAST Track の対象児の選定

対象児の選定には20の幼稚園に働きかけた。幼稚園の教師からの情報と幼稚園で面接をして、対象児を選び出した。その際、親に対しては、子どもに対する養育態度、育児方針、家庭環境を調査した。幼稚園の教師には、子どもの社交性、学業、ルールに従うことができるかなどについてデータを得た。以上の結果から、行動的・学業的に問題のある子どもを特定し、このプログラムに参加することがプラスに作用する子どもを選び出した。教師又は親が子どもの参加に難色を示した場合は排除した。(この研究推進には Vanderbilt 大学が担当し、National Institute of Mental Health から14億5,000万円の資金援助を受けている。)

プログラムの計画及び評価のために、以下のようなグループを作った。

第1群：問題のある子ども達の実験群である。リスクのある児童で介入を受けるグループである。4学校区以外の地域から40名選んだ。

第2群：統制群1で、問題のある子ども達であるが、介入をしない子ども40名。

実験群と統制群1の児童については、リスクの程度に応じて順位をつけた。幼児から中3までのデータをコホート法（縦断的研究のためのグループ）により収集した。

第3群：統制群2でランダムに普通児40名を選んだ。

幼稚園で対象児を発見し、小学校へ入学した後に、プログラムに参加させる方法をとった。次の年度にも、同様の方法で小学校1年生からプログラムに参加させ、第2コホートとした。第3コホートまでプログラムを実施し、現在このコホートの子どもは中3、中2、中1になっている。総計116名である。対象児に近い子であっても、統制群の子どもには何も対処していないのは心苦しいと担当者は思っているとのことであった。統制群の子どもがプロジェクト参加校に転入した場合には、データから排除した。プロジェクトによる介入は、中1までとしたが、中3までデータをとっている。

3) 介入の全体的内容

介入は1年生から10年生まで行われるが、データは高校卒業（義務教育終了）まで追跡して収集している。介入の度合いは、1年生から3年生まで一番多く、3年生から6年生で少し少なくなり、7年生から10年生までは最も低い程度の介入になり、この頃になると親に対するよりは、主として生徒に焦点を合わせて介入している。

最も重大な介入は、第1学年の介入で、次の6つからなっている。

- ①子ども達に対して教室での教師主導の介入
- ②両親に対する介入、家庭と学校の肯定的な関係の促進、親に行動統制スキルを教える
- ③両親の問題解決スキル、自己効力感、生活統制力を育成する目的で家庭訪問指導
- ④子どもの社会的スキル訓練（Friendship グループ）
- ⑤子どもへの読みの個別指導
- ⑥教室の中で子どもの友情を高めることを支援（仲間作り）

4) 介入の実際（PATHS プログラム）

これは Promoting Alternative Thinking Strategy（違った考え方を促進する）の略である。リスクを抱えた子ども達はネガティブな感情を表現するため良い人間関係をも持てないことが多い。そういったマイナス面を克服するために、自分の感情に気づいてそれを分類し、その感情がどのように作用するか知ること、いま、どのように行動してよいのか考えをめぐらすことができるようになる。どんな感情を持っても良い。ただし、どんな感情も表現して良いとは限らないことに気づくことが大切なことを知る教育プログラムである。

- ①どのようにして自分の感情をよりじょうずに表現するか
- ②社交性に関してどうやって問題解決していくか

- ・児童に感情に関する問題解決の仕方が誤っていることを自覚させる
- ・頭の中でプランを立てさせる
- ・実際にやってみて結果を見させる

③教師がどのようにルールを決めて子ども達に教えていくのか

- ・親達にもどのようにルールを決めて家庭の中に取り入れていくのか
- ・学校と家庭において同じ方針でその子どもの為に同一ルールを決め取り入れる

1年生から6年生までの児童に対して少なくとも週に2回約15分から20分位クラスでこのPATHSを積極的に取り入れてもらう。通常平均して4回は取り入れてもらった。又、感情についての教育は、本を貸し出して読んでもらうことで感情の問題や感情の問題解決について情報を提供することも合わせて行なっている。

子ども達が、このPATHSから学ぶことは、基本的な自己信頼感、感情についての話し合いと語彙、友達作りのスキル、問題解決の初歩的スキル、礼儀作法、情緒発達に関するもっと突っ込んだ関連事項の学習、問題解決の中期的スキル、集団で共同学習すること、自己覚知と仲間への抵抗などである。

(1) 親に対するコンサルテーション

学校と家庭を結び付けるため、子どもの問題の相談にのる。その際 ABCD モデルが採用される。ABCD モデルとは、社会的スキルを子どもに育成するために、教師や親がどのようにルールを決めて子どもを教育したり、躾めるのかということの理解を促すもので以下のような内容である⁽⁵⁾。

A (Affective)……	感情面	①自分の感情を理解する ②自分の感情をコントロールする
B (Behavioral)……	行動面	①自分の行動をコントロールする ②適切な行動スキルを獲得する
C (Cognitive)……	認知面	①分析的・論理的推理スキルを身につける ②自分で考える（自己決定、自分の責任で解決する）
D (Dynamic)……	人格面	①積極的な自己評価を得る ②健康なパーソナリティ発達を促す

(2) 教師に対するコンサルテーション

教師と話し合い、子どもの権利、子どもに今何が必要か、指導の方針などの相談にのる。また、リスクを抱えている親は、学校に対してネガティブな接触になるので、その点について話し合い、改善するよう話し合う。教師とのコンサルテーションでは、次の内容について子どもとの触れ合いで大切にするよう理解を促す。① emotional understanding（感情面の理解）、② self-control（自己の感情と行動の制御）、③ school problem-solving（学級・学校の問題の明確化と解消）、④ peer relations and self esteem（友人関係と自己評価の改善）

これらの内容は、子どもの発達段階に応じて、適切な学年目標として指導される。例えば、1年生では、「幸福とはどのような感情なのか」、皆で理解し、「どんな時にそう感ずるのか」、「そうでない人にとっては何が問題か」をまず知ることなどである。例えば、「バレンタインデーの

日にどのような感情を抱くか」をまず聞く。それぞれ人によって受け止め方が違う。子どもへの指導は、どんな感情を抱いてもそれは構わない。しかし、悪い行動をしてはいけないと教える。問題解決の方法として対象児は、自分の行為が間違っているとは思っていない。このため、まず、この点を自覚させる必要がある。そして、解決方法には1つだけではないことを理解させる。例として、『ボールを取られた時』の行動として、①取り返す、②泣く、③教師に言うなど、解決方法は幾つかあることを自覚させ、次いでどうするのかを自分でプランを立てさせる。そして実際にやらせてみるというような練習をするのである。

教師には学校で週に2~4回、30分程度取り上げてもらい実施した。PATHS計画のテキストはそれぞれの学校に提供した。親に対する支援としては、小1~小4の親を対象に、1週間に1度、または、2度、2時間半指導した。これは子どもが遊びに飽きないように、親の理解を得るためである。

(3) 個別指導

1年生から2年生までは1週間に3回、1回30分、合計1時間半、算数と読みに関して個別指導を受ける。親も同席して個別指導を受けることで、親に対して子どもにどのように教えたらいいか知らせる。3年生以降は基本的にはやっていない。

- ・センターを中心として家庭教師を派遣した。1週間に3回、1回30分のサービスを受けること。
- 小1・小2では、このような個別指導以外に、親に対して子どもの学業の指導方法を教えた。
- ・3年~10年生までは、生徒の希望によって個別指導を実施した。親の希望は少なくなるため、親への指導も少なくなった。

(4) PEER PAIRING

- ・対象児は、他の子どもを誘って、30分間センターで介入を受ける。このプログラムの目的は、他の子どもと良い友達関係をつくることができるようにすることにある。普通の子どもを連れてきて、その子が教師の役割をして、対象児と良い関係を形成する。対象児は、一般に疎外感を持ち、遊んでももらえないという気持ちを抱いている。このためゲームを通してうまく遊ぶことが介入になる。ゲームはとても楽しく、ここに来るのが楽しみとなっている。センターでの介入は年間4回である。もし、友達との遊び場面で、困った行動を起こした時には、叱責する。極端に悪い場合には、特別な処置がなされる。一般に対象児は、遊んでいたいためにそれほど逸脱した行動はとらない。

リスクのある子どもは、年に3ないし4回クラスの友達を誘って介入を受けることができる。この目的はよりよい社交性を育てることである。これは学業ではなく、先生と一緒に介入ゲームに参加することである。例えば、陶芸をしますと、連れてきた子どもが普通の健常な子どもであると仮定して、先生の真似をしたり、順番を待つ、ルールを守るなどの正しい行動の仕方をとります。リスクを抱えた子どもはその子を適してその場でどうすれば良いのか学ぶことができます。リスクのある子どもは、なかなか友達と遊んでももらえずに疎外感を抱いていることが多いし、普通の子ども達は、介入遊びをしたい、その子の役に立ちたい、30分他のと

ころで遊びたいなど、介入遊びに参加することの動機づけが高いことを活用して先生と一緒に介入遊びに参加している。

(5) Mentors (良い指導者モデル)

家庭環境で積極的な大人の役割モデルがない場合は、それに代わる人を地域のコミュニティの大人にボランティアをしてもらいやってもらいます。例えば、食事に連れて行く、あるいは電話する等と積極的にかかわってもらうことを取り入れている。それには次のようなグループやワークショップ形式の教育実践がある。

- ・ リスクを抱えた子ども達の親のグループが週に一度か2週間に一度集って2時間半くらい、しつけについて、PATHS のプログラムについて、積極的な社交性について、どのような遊び方が有効かなどについて話し合う。
- ・ 子どものグループも、親が刑務所に入ってしまうなどなくなった時どうするか、仕事の事、友情や恋愛のことなどをテーマに話し合う。
- ・ 2・3年生は、最初の1時間は親のグループ、子どものグループがあって別々に話し合う。2時間目は親子合同の話し合い、最後の30分は、個別指導を行う。
- ・ 4年生から7年生は同じ形式で行うが、30分の個別指導はしない。
- ・ 8年生以上は、親の参加はなく、子ども達だけで行う。

5) PATHS の成果

小学校から介入を行った子どもはクラスの友達から受け入れられている。社会的スキルについては、良い結果となっている。この計画の最終目標は、①犯罪を犯さない、②良いアメリカ市民になる、③高校を卒業することとなっている。120人中15人が高校を卒業すれば、社会的に負担する費用が軽減されることになる。現在116人が中学に通っている。その点では良い結果と言える。親自身がこのプログラムに参加することにより、学校に対して良いイメージを抱く。これが子どもに良い結果をもたらしている。

2 専門職としてのスクールサイコロジスト

スーザン・グレイスクール（テネシー州）という病院併設の施設を訪問した。ここでは、特に発達に障害のある子ども達をも対象とした施設でカウンセリングルームもあった。また、レーガン高等学校、トリニティ大学カウンセリングセンター（いずれもテキサス州）等を訪問し、その窓口に置かれているパンフレットやブックレットなどを入手してきた。一例を紹介すると、テキサス州の北部独立学校区の委員会が作成したブックリストの中に「Children At Risk-Behavior Disorder」というものがあった。教師向けのこのブックレットは1989年に既に公表されているのである。内容を紹介しますと、概ね、次のようなものである⁶⁾。

1) 「行動障害」全体の説明（表紙扉）

行動障害を伴う子ども達は、学業困難、卒業、学校生活の怠慢、憂鬱などに高い危険性を示す。彼らは、他の子ども達の活動を乱したり、学習を妨害したりすることから、学級の中で欲求不満な状態であったり、イライラしている。彼らの問題は、概ね下に挙げる三つのカテゴリーに分類できる。

① 注意欠陥/多動性障害

② 反抗挑戦性障害

③ 行為障害

このブックレットは、このような子ども達の診断や予防のための情報を提供している。また、嘘をつくことやだますこと、そして実質的な虐待などの特別な問題についても論究している。最後に、関連する問題についての簡単なチェックリストも掲載してある。

2) 注意欠陥/多動性障害の定義

◎特徴

- ・注意散漫である。短い時間しか注意をはらうことができず、集中できない。人の話を聞くことができず、注意を払うことができない。しばしば、一つのことに集中できず他に注意が向いてしまう。
- ・刺激に対してそれを聞き流すことができない。興奮することなら何でも興味を示す。
- ・歩くよりも駆け出したり、そわそわしたり、度をすぎる。本人にとって楽しいことをしているときでさえもじっと座っていることが難しい。
- ・興奮気味であり、騒がしい。極端におしゃべりである。しばしば他にちょっかいを出す。
- ・静かに遊んだり、順番を待つことができない。
- ・考えることなしにはずみで行動する。事故を起こしたり、傷つけたりする。しばしば判断なしに行動する。
- ・軽率で、心が定まっておらず、組織だてがなく、偶然的である。活動が性急である。活動がだらしく、不完全である。物をしまっておくことができない。持ち物をよくなくす傾向がある。
- ・指導の効果があまりなく、特に、段階をおった指導でないときは効果がない。しばしば、質問を多く発するか行動の方向性が定まる前に仕事をし始めたり、質問を連発する。

○関連する状況

- ・女子よりも男子の方により見られることが多い。しばしば家族の中にも同じ例が出現する。
 - ・四歳までに障害を見ることができるが、学童期に見られる障害で学齢時までは診断されることがない。障害のほとんどが七歳までに見られる。
 - ・社会的ストレスや乱れた、混沌とした環境でより強調される。
 - ・注意を維持することが求められる場所（学校のような場）ではより強く障害が現れる。
- ※行動を規制されたり、新しいことに直面したり、または、一対一の注意をより多く払わなければならないような状況においては逃げ出すこともあり得る。

3) 対応

- ・自尊心感情をもてるように成功体験を持たせる工夫をする。趣味や特に興味を示すことに導く。子ども達が達成感をもてる行動に焦点を当てるよう工夫する。
- ・友達との友好的な関係を築くよう導く。仲間として楽しく活動できるような集団に組み入れる。
- ・多くの大人たちの監督の中に入れること。子ども達の行動をよく観察し評価すること。もし、子ども達が注意散漫になった場合には、彼らの注意を喚起すること。
- ・彼らの行動上の問題について、非公表の形で論議すること。子ども本人ではなく、行動についての不満足な状況について強調すること。注意や制止の方法として、無言の動作（例えば、頷くことや指を挙げるようなもの）を用いて同意を与える工夫をすること
- ・プリントを配るなどのような、あまりエネルギーを浪費しない方法の教室での行動や作業の役割を与えること
- ・医療上の治療の必要性からかかりつけの内科医や小児科医への相談を両親にすすめること。

4) 予防上の対応

- ・子ども達を気が散るような状況にある教室に放置しないこと。彼らは秩序だったしかも、規則性のある生活を必要としている。
- ・彼らの注意を喚起する前に指導することを避けること。作業を進行する前に名前を呼んだり、アイコンタクトをとること。
- ・決して、多く作業を一度に課さないこと。むしろ、一定の時間に一つの作業を行わせること。他の作業に当たる前に一つの作業をしっかりと終わらせるようにすること。
- ・小さな混乱が見られたことにより、間違いを発見することを避けること。
- ・長時間、イスの座っての複雑な作業を強いることを避けること。通常の一頁分の半分くらいの紙に二、三の課題を列記するような工夫をすること。机に向かっているときは、彼らの注意が集中するように配慮すること
- ・彼らの行動が成功しないような場合は、彼らは意地っ張りや、頑固な状況をしばしば見せることを常に忘れないようにすること。彼らに、一体何をするのかということを常に理解させるように努めること
- ・彼らの注意散漫な状況や行動に対しても常にイライラしないように努めること。彼らは多くの穏やかな注意や指導が必要であること。
- ・失望は避けよう。これらの子ども達は、しばしば怒りを全面に出すし、イライラするし、一緒に行動する人誰に対しても不満をぶつけることがある。かれらは、つねに、多くの大人の支えが必要なのであり、もし、彼らの直接的な症状が軽減したとしてもそれは変わらないのである。

5) 関連する学習障害の症状

注意疾患/多動性障害は、しばしば他の学習障害と複合して症状を引き起こすことが留。学習上の障害、特に書く作業、欲求不満状態や退屈であると感じることが多い。最も一般的な学習上の問題は以下のような障害である

- ・失読症(難読症)ーアルファベットを学んだり、読んだり、読んではいけるが内容理解ができていなかったり知的能力

や文化的機会に関しては十分な機会があるにも関わらず、文字を綴ることが困難な症状を示す。

- ・不完全失語症—聞くことや知的能力、社会文化的機会に恵まれていたとしても言語を用いたり、理解したり(情報の受けてでも送り手でも両方の場合に共通する)する事に困難を示す症状を示す。不完全失語症の子ども達は、しばしば、話の内容や骨格を構成することができない。彼らは情報や話す音を正確に受け取ることができないために、不正確な発音をすると考えられる。
- ・書字錯誤症—書かれた文字に対して特に難解な条件がない場合でも読みやすく書くことができない症状を示す書字錯誤症の子ども達は、しばしば、視覚的な像を模写することができない。かれらは、形を区別することができるかもしれないが、それらを絵で表現することを通して再生することはできない。
- ・計算障害—数概念を理解したり、利用することに困難な症状を示す。計算障害を伴う子どもたちは、数を反対から数えるようなことや、物の数を言い表すような順序性を理解することに困難性を示す。
- ・関連する特徴—過激に行動的である、粗野で調整が利かなく、ゆっくりとして意味不明な言葉や、集中力に欠けていたり、低い自尊感情や、注意が長時間持たないなどの行動が見られる。

※もし、学習問題が頻繁に起こり、深刻であるならば、機会が存在するなら、特殊教育への参加が有効となるでしょう。問題に関連していることとしての要因、聴覚障害、精神薄弱、そして社会文化的要因などの考えを除外することが大切です。

※この後、行為障害等の説明が続いているがここでは省略する。

6) チェックリスト

注意欠陥/多動性障害スケール				
氏 名		日 に ち		年 齢
曜 日		一日の中での時間		
項 目		0 いつでも 見られない	1 ときどき 見られる	2 とても 見られる
1	そわそわ、もじもじする			
2	イスにじっとしていられない			
3	注意散漫である			
4	順番を待つことができない			
5	答えを漏らしてしまう			
6	作業を最後までできない			
7	注意が持続しない			
8	次のことにすぐ気移りする			
9	遊んでいるときもうるさい			
10	騒々しく話す			
11	他のじゃまをする			
12	きちんと話を聞けない			
13	物をよく失くす			
合計点				

※計算の仕方：全ての項目の点数を合計して下さい。注意疾患/多動性の状況を示している子どもを対象にして下に挙げている基準を一般的なガイドラインとして参考にして下さい。
21-28：深刻な状況
11-22：中度
5-10：軽度

V お わ り に

上記に挙げたような資料を現在翻訳中である。私自身のスクールカウンセリング活動の参考にといい収集してきたが、機会があれば、公表していきたいと考えている。もちろん私の翻訳の力量には少々不安があるが、DSM-4 と読み比べても、その内容は実践的である。何よりも、対応のマニュアルが示されていることは、現場の教師一人一人にとって参考になると考える。

本稿をまとめるにあたり、多くの方から資料や助言をいただいた。Vanderbilt University の Fast-track の責任者、Dr. Alison Fulle 氏からは、本稿で紹介した以上の説明を受けると共に読書療法で使用しているテキストをいただいていた。Trinity University の心理学プログラムの責任者 Terry Miglior 氏には、カウンセリングセンターについての案内、学校心理学専攻の大学院生との協議の時間をいただいた。UCLA ロサンゼルス校の Dr. Zanwil Sperber 氏は

Licensed Psychologist であり、実際の臨床経験をもとにしたアメリカの青少年の問題について率直に意見交換を行った。また、ノートルダム大学の Dr. Anna McQuinn 氏は、日本においても最近注目されている「ブリーフセラピー」の研究者であり、アメリカにおける動向について説明を受けた。他にも、訪問した先々で多くの方から資料や説明を受けたがそれらの全体を報告するには紙幅と時間が不足している。今後の機会としたいが、それらの方々に心より感謝申し上げたい。〔平成12年度北海道浅井学園大学特別研究（海外研究）費助成研究〕

注

- (1) Lectuer Material by Dr.Linda Ashford. "Psychological Foundations of Education"
- (2) Home-page of Brentwood High School. "What is the School Psychologist?"
- (3) American School counselor Associaton. (1990)"ASCA Guidelines for Developing a Developmental School Counseling and Guidance Program". Alexandria,VA.
- (4) Eakin Elementary School of Nashville Mettopolitan School. " The roll of School Counselor at the Eakin Elementary School."
- (5) Peabody College, FAST Track Center. "ABCD Model of Development"
- (6) Elizabeth Lende. (1989) " Children At Risk—Behavior Disorder " North East Independent school District Department of Special Education.